

人の苦しみを背負って歩く

石川 「喜びの種をまく」という対談テーマをいただいて、まず最初に浮かんだのは、お釈迦様が私たちに残してくださった願いのことです。

この地上に生を受けた者として果たしていくべきことは、よき種をまいていくこと。決して憎しみとか、悲しみの種をまいてはならないということ。生かしていただいていることに感謝できる人生を築いていくこと、少しでも人様のお役に立つことをなして喜びの種をまかせていただくこと、これこそが人間として一番大切なことだ、と釈尊は説いておられるのではなからうか。そんなことが去来しましてね。きょうは坂岡さんとありのままを語り合って、一緒に学ばせていただきたいと思っています。

坂岡 こちらこそ、よろしくお願ひします。

石川 坂岡さんが初めて私のもとを訪ねてくださったのは十二年前でしたね。十年ひと昔といえますから、もうひと昔を越えたわけで、随分深いご縁だったんだなあと実感しております。

坂岡 ちょうど桜の花が咲いている時期でしたけれども、私の中では桜ではなくて、涙の花が咲いているような時でした。

いろんなご縁をいただいて、意図せず「はぐるまの家」の看板を掲げて、問題を抱えた子どもたちを預かるようになったのですが、運営に行き詰まっしてしまっ。引き取った子たちには「米びつに明日食べるお米がないよ」と不安を抱かせてしまい、両親からは、実家の商売から離れたために始終小言を言われ、娘たちからは「実の子の私たちには、親子の時間がちっともない」と責められ、不安や自責の念が胸中をぐるぐる回っていました。

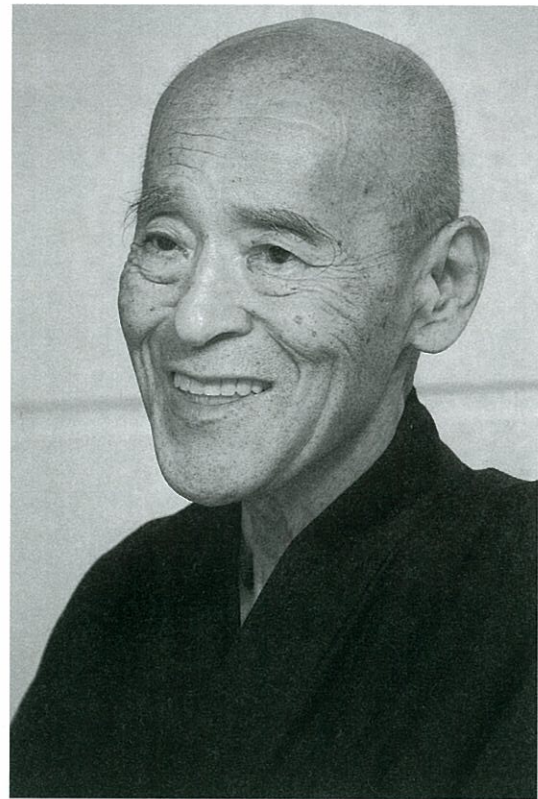
何か心の拠り所が欲しくて本屋さんに行きましたら、たまたま石川先生の『逃げたらあかん』という本が目に残りました。買い求めて家で一気に読みました。ぜひこの本を書いた方にお会いしたいと思っ。たんです。

石川 坂岡さんの思いの深さが、私のような者の書いたものからでも、なにがしかのものを汲み取ってくださっ。たんでしょ。

坂岡 「逃げたらあかん」という言葉を、この方はご自身の人生でどんなふうに使ってこられたのか、どうしても

●対談 石川洋&坂岡嘉代子

一燈園の創始者、西田天香師の最後の弟子として、下坐の行に生きてきた石川洋氏。「はぐるまの家」で問題を抱える子どもたちの立ち直りを支援し続けてきた坂岡嘉代子氏。様々な葛藤、確執を乗り越えて、いま、たくさん喜びの種をまき続けているお二人に、混迷を続けるいまの社会が取り戻すべき心、社会の根本をなす親子のあり方について、これまでの体験を交えながら語り合っていた。



托鉢者

石川洋

いわく・よう 昭和5年栃木県生まれ。17歳の時、一燈園の創始者・西田天香師に出会い、入園を許され無所得の奉仕者となる。平成10年、51年に及ぶ一燈園生活から離れ、市井の托鉢者として再出発。カンボジアでの難民救済活動など国内外で奉仕活動が続く。全国各地に「石川洋人間塾」が結成され巡講している。著書に「13歳からの人間学」君よ、志を持って生きてみないか（いずれも致知出版社刊）など多数。

一人には

一人の光がある



はぐるまの家代表

坂岡嘉代子

さかおか・かよこ 昭和21年福井県生まれ。16歳で脳脊髄膜炎発病以来、青春を闘病生活に生きる。その間、県手話通訳を経て、ろうあ者、非行少年のための太鼓グループを結成。63年「和太鼓はぐるま」としてプロデビューさせる。平成2年親子の駆け込み寺「はぐるまの家」開設。以来カウンセラーとして活躍。11年福井県教育庁学校教育の道徳実践活動推進委員。15年武生市人権擁護委員。著書に「家族を夢みて」「母子をならう」（いずれも若越出版刊）他多数。

その内なる光を育む